

# ダイズ体系化技術マニュアルの入手法について

熊沢誠人・五島一徳 (大分県農業技術センター)

Masato KUMAZAWA and Motonori GOSHIMA : Data-entry-method of Working System on Soybean Cropping System by Personal Computer

転換畑作技術体系化のマニュアルをパーソナルコンピュータを利用して作成することが各県で進められており、このうち大豆体系化技術マニュアルの作成については、農研センターからリレーショナル、データベースソフトのdBASEII上で操作する検索システム、メンテナンスプログラム、データファイルが、供給されている。

少数のデータ入力については、メンテナンスプログラムで充分であるが、数百に及ぶ最初のデータ入力をする場合多大な労力を必要とする。

そこで、入力、修正に際して、一覧性の高い表集計の簡易なソフトを仲介させることにより、容易で労力を軽減させることが出来た。

使用したのは、ハードは、PC9801VM2に1.5Mbyteラムディスクをメモリーとして、マウス、プリンターを使用した。ソフトはdBASEII (アシントンタイト)と表計算ソフトに、LOTUS1-2-3 (ロータス)を用いた。

### 1. 手法

最初に、農研センターから供給を受けたデータファイルをLOTUS1-2-3のユーティリティで、dBASEIIのデータ形式からLOTUS1-2-3の形式に変換する。つぎにフィールド名のみを残して削除し、県版のデータを入力する。この際、表集計ソフトの持つ複写、移動、窓分割、結合、編集等様々な機能を利用し入力労力を軽減する。入力を終了したファイルは、再度LOTUS1-2-3上のユーティリティで、dBASEIIのファイル形式に変換する。表計算ソフト利用による利点を上げると、次のとおりである。

(スクリーンエディター自体を利用する)

1) 通常データを収集後整理表をつくり、コンピューターに入力するが、表計算ソフトを用いれば、その必要

はなく、全体を常に一覧しながら、作業ができた。

2) 一覧表自体がスクリーンエディターとなっているため、気がついたとき修正が可能である。その時にはカーソルをその場所に移動して修正すればよい。

3) 各レコードの構成、順序の変更は容易にできた。

4) 複写機能を利用することにより、同じ文字列の入力の必要がなく、キーをたたく労力を大幅に減少させる事ができた。

(ファイル相互の結合機能を利用する)

1) マニュアルのデータファイルは114と多いが、各ファイルに含まれるフィールド名は、重複するものが多い。そこで、この項目を、結合、複写により、入力の手間を省いた。一例を第1図に示した。

2) 表作成の際、出典を記入する欄を設け、入力データの修正、確認、データファイル相互の関係を助ける手段とした。

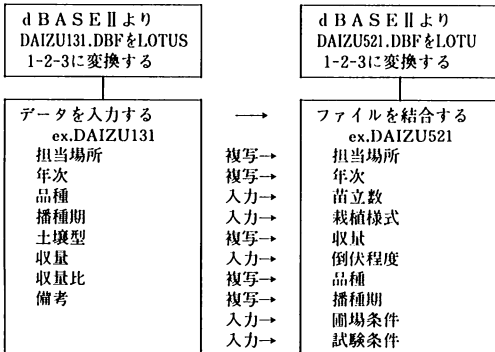
3) 他のファイルと対応させながら入力、加工、修正ができた。

(マクロコマンド利用による積算温度の自動入力)

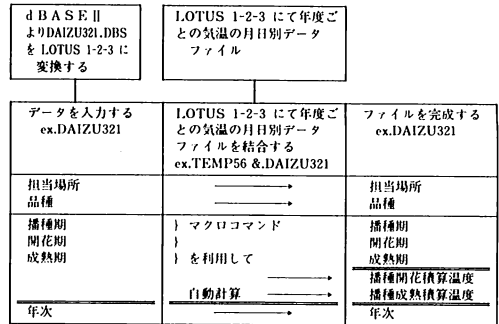
1) 播種期から開花期までの積算温度については、出典に記載のあるものがなく、担当地別に、年月日別の、平均気温のデータファイルを結合し、年月日から気温を計算する簡単なプログラムをマクロ命令を利用して組上げ、自動化した(第2図)。

その他、表集計ソフト自体に、ソート、検索、グラフ化、最小二乗法等の機能があるため、県段階の、データベースとしても、そのまま利用できた。

なお、データファイルの変換作業が必要なため、少数のデータの入力、修正には、効率が悪く不向きであった。



第1図 ファイル結合による省力化



第2図 マクロコマンドによる自動化